

消えた蜜蜂

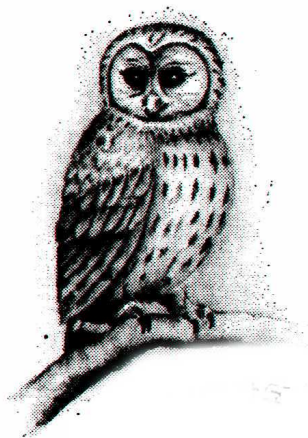
武田雄一郎著



作 品 集

消えた蜜蜂

武田雄一郎著



甲陽書房刊

著者略歴

武田雄一郎 本名・瀧澤一雄

大正十二年一月 長野市に生まれる。

昭和十七年十月 独学で「実検」に合格、専門学校の入学資格を得る。

昭和十九年一月 兵役で中国へ、終戦と同時にシベリアへ抑留される。

昭和二十三年 復員。

昭和二十六年三月 明治農業専門学校農学科卒、教員生活にはいり、現在、長野県須坂園芸高等学校教諭。

昭和三十三年から長野ペンクラブ『層』同人。

著書『鷹笛』（昭和四十三年 長野ペンクラブ刊）

現住所 長野市吉田一―一六―三三

昭和五十四年一月一日印刷
昭和五十四年一月十日発行

消えた蜜蜂

定価 二〇〇円



著作者 武田雄一郎
印刷者 太田久夫
発行者 石井計記

東京都千代田区神保町二ノ一〇
長野県下諏訪町清水四三七二

発 行 所 甲 陽 書 房

（〒一〇一） 電話 〇三（二六一）二二六〇番
振替（東京）九―一七三三九番

（〒三九三） 電話 〇三六二（七）八一八九番
振替（甲府）一一六〇番

落丁本・乱丁本はお取り換えます

目次

消えた蜜蜂	五
落ち猿	四一
フクロウ	八〇
七本の松	一二二
休耕田	一六七
あとがき	二〇五

装
画

瀧
澤
綠
鳳

作品集
消えた蜜蜂

消えた蜜蜂

1

尾籠なことだが、近頃また尻の具合が悪くなった。奇妙なことに気が腐ったとき決まって起きるのである。痔というものは体を冷やしたときとか、便秘勝ちの人に出るものだといわれているが、私の場合はちょっと変わっているのである。寒い屋外に長時間でいたってなにもないのに、いらいらしたときなど、気象に関係なく再発するのである。今度のこの原因が解らなかった。強いていえば所長がそろそろ辞めたらどうかと酒の席で言ったことがある。そんなことが気になっていたのかも知れない。私の痔は年に二、三回気分のすぐれないときに起こるのだが、心配事が去ればいつの間にか治ってしまった。その都度いつも思ひ出すのが蜂蜜の外用であったが、すぐ忘れてしまった。今度は重症のようなので使ってみようという気になった。そこで知人・楨本を訪ねることにした。最近、作ったばかりのドアをなにか羨望的な気持ちで開け、声をかけた。返事がないので気安く裏に回って見た。彼は麦藁帽子に網の覆面をつけて、鉄製の三脚梯子に乗っていた。

「なにしてるんだい」

私が声をかけたが振り向きもしなかった。

「分封しやがってなあ」

声で私ということが解ったのだが、蜂から目をはなさなかった。見ると二メートルばかりのリンゴの枝に蜜蜂が円錐形の塊りとなってぶら下がっていた。表面の蜂はその周りを飛んであたりを警戒している。槇本は蜜蜂の玉になっている下に三脚梯子をすえて、巣脾入りの巣箱を載せておいた。これからが私の興味のある場面だった。彼はポケットからゴム手袋を出すと、両手にはめ、蜂の塊りをはらい落とした。奇妙な羽音をたて、巣箱の中に落ちた。と同時に半数の蜂は、あたりにワーンと飛び広がって再びもとの枝に飛びついた。私はその場を逃げようとした。

「大丈夫、刺さないから」

槇本はようやく私を見て言った。飛び戻った蜜蜂を再び手で切り落とした。二、三回繰り返すと殆どの蜂は巣箱の中に入ってしまった。槇本は梯子から下りてきた。あとは放っておいてもあの巣箱に棲みつくと言っていた。

「蜜蜂って面白いもんだなあ」

「そうだい。おらあに蜜蜂の話をさせれば、三日三晩も話したってつきねってば」

自慢げに言った。二十年も養蜂をやっていたれば蜜蜂と話が出来るほどになっているのかも知れない。蜂だって言葉で喋ることは出来なくても動作で示すことは出来るものだ。その方が正直であり、正確だと話してくれた。しかし、多少のホラもあると私は思っていた。私は分封というものは初めてだし、どうして分封するのか彼に訊いてみた。

「はやくいえば分家に出ることだ。王蜂が箱に二匹以上になると、古い王蜂は若い働き蜂を連れて箱を飛び出すんだ。それも働き蜂が腹一杯に蜜を持ってから飛び出すんだからたまらねえよ。残った箱は蜂も蜜も少なくなつてやりきれたもんじゃない。こんなことは珍しい。前々に人工分封しちゃうのに」

リンゴの枝には、もう僅かな蜂しか塊っていなかった。槇本は巣箱を三脚から地面に下ろし、蓋をした。

「しばらく様子を見るじゃ」

槇本は養蜂のベテランで滅多に分封などさせなかった。蜜を取るのが目的で、数を増やしながらなかつた。そうすれば貯蜜が多くなることは確実だった。彼は私の持ってきたサイダービンを受け取ると物置に入った。私は、栗かウイキョウの蜜を欲しいと頼んだ。すると槇本は、げげんな顔で問い返した。

「薬にするんかい？ 痔でも悪いんじゃないだろうな」

私はそれには答えなかった。痔に蜂蜜がよく効くということ、私の専売特許だと思っていたのに彼は知っていたのである。蜂蜜が痔の妙薬ということを知ったのは昨年のことである。屋根瓦がずりさがつて雨漏りするので、いま流行のカラートタンに葺き替えたのである。そのとき越後から出稼ぎに來た老職人がいて、何かの話のきっかけから痔のことが出た。これに一番よく効くのがヤマカガシのツボ焼きで、その次が蜂蜜だと教えてくれたことを思い出した。蜂蜜の中でも栗やウイキョウなどは特に効果があると言った。彼の言うことには何人もの患者に教え、完全に治らせたという。私は半

信半疑で、今まで試そうとしなかったのだが、近頃、酒の飲み過ぎもあって今までになく重症のように思われた。そんなことで試す気になったのである。槇本は昨年搾ったという栗の蜜をサイダービンに入れて持って来た。

「金はいらんからな。痔でも治ったら存分くれやハハハ」

私は、蜜のはいったサイダービンを自転車に吊すと、分封した蜜蜂のところへ行ってみた。槇本はフタをはいで巣脾に目をとおしていた。王蜂の存在を確かめているらしかった。

「いたよ。いい王が」

槇本は叫んだ。見ると腹部の大きい虎縞の王蜂が急がしそうに回って歩いていった。その触角といい、体格、体色などは申し分なかった。これなら産卵能力も充分あると素人ながら思ったのである。働き蜂は箱の片隅に小さな塊りとなったり、箱の内面や巣脾にくっついていった。いずれもその場に停止の状態でもものすごい羽ばたきをしていた。分封した蜂はあたりに対して極度に警戒をするものだという。一体こんな巣箱に王蜂が落ち着いたが いいのだろうか。そんな心配もあった。

「もう大丈夫、こっちのもんだよハハハ」

うれしさをテレかくすように言った。私は二、三年前に東京で消防士や警察官を動員して蜜蜂を退治しているのをテレビや新聞で見たことがある。飼育法も知らずに蜜欲しさに養蜂を真似て分封させたのである。分封したって他人の迷惑にならなきゃ問題はないのだが、住宅の樹木に塊りとなった蜜蜂は日増しに荒くなった。蜜蜂というものは分封当時は人間に対してひかえ目のものだ。しかし、こちらから挑戦すると王蜂を守るため決死的な行動に出る。これが蜜蜂の共同生活における厳たる掟な

のである。いや本能といってよいだろう。槇本は、なんの苦もなく巣箱に分封群を鎮めさせた。これは蜂の生態をよく知っていたからである。消防士が放水したり、火焰放射器で蜂を殺そうとしたとき、特攻的な働き蜂の怒りをいやがうえにもかきたてたのである。機動隊が蜂を退治する前に養蜂家にどうして相談しなかったのか。槇本のような人は農村にはたくさんいる筈だ。

「珍しいことだ。ゆっくりしていかつしやい」

土間に私を案内してくれた。長居をしない客には土間式の応接間は絶好なものだ。農家の座敷にあがってしまふと、つまらぬ話で時間を無駄にするものだ。「ご用件は？」式にやれば近所からは嫌われるし、いい気になっていると半日もお相手をしなくてはならない。これが農村におけるレクリエーションであると誰かが言ったが、私も解らないこともなかった。私はそこで蜜蜂の生態について誰も知らないことを聞かせてもらった。そんなことから、蜜蜂に対して私はほのかな興味を持ち始めた。

2

所長に呼ばれた。所長は、余程なことがないと人を呼ばなかった。

「実は本庁の人事課長から話があつて転勤してもらいたいんだがね。どうだろう」

「どこへですか」

「やあ、最初にそれを言わなくちゃいかな。し尿処理所だがね」

「はあ」

あまり咄嗟なことに、とまどつてしまった。希望で、し尿処理所に行くのなら別だが、今より条件

の悪いところへ移すことは左遷である。退職勧奨してもやめない者への腹いせ人事であろう。ゴミからウンコになりさがったかと情けなくなった。すぐ返事をする必要はない。妻と相談することも必要だろう。ゴミ処理所もこの節は経営の合理化のため、大型機械の導入と清掃車による収集も民間会社に請け負わせた。私の担当は秤量係で比較的楽な仕事だった。入場する清掃車を車ごと目方を計り、退場する空の車を計り、その差をゴミの目方として報告すればよかった。ある日こんなことがあった。

友人の樽田が私の部屋に入ってきた。

「いまのはどこの組じゃ」

「吉田組じゃが」

「ふてえやろうどもだ」

「なんだい興奮して」

「いまあけたゴミの中から大きな石が出てきたんだ」

樽田の目玉は顔じゅうにひろがっていった。今にも目玉が破裂しやしないかと思われた。

「ふーん、どのくらいの」

「五〇キロはあるかな」

樽田は請負組を目の仇にしていた。自分達が今までやっていた仕事を取ったのは奴等だと思っているからである。市が民間会社にゴミ集めを請け負わせたのは市職員である人夫は仕事が緩慢で油を売ってばかりいたからだ。そこへいくと請負組はトン当たりの金を支払う仕組みになっていたから、人夫達は朝早くから休憩なしで働くようになった。昼食の時間は一時間あるのに、道路傍で弁当をとる

と、すぐに仕事に取り掛かった。私がゴミさらいをやっている頃は、ゴミ箱から箕に入れ、トラックまで運んだものだ。一日にどのくらいの量を集めなければならないという基準があった訳でなく、全く誠意だけで働いていたものだ。ところが戦後は人間がこすくなったのか、歩合制にもしなければ働かないのが現状となった。請負制にし民間会社におろしたのもそこらに原因があったのである。市では人夫に希望退職させたり、配置換えをしたりして人員整理をしてきたが、まだ人員が過剰のようだった。一方、し尿処理所は拡張されたので、そちらに配置転換をさせるのが一番やりやすい人事でもあった。

「どうだね。給料も二号俸アップしてくれるがね」

「明日まで待ってください」

「いいが」

その晩、私は妻の清子と相談した。清子は見栄や外聞より二号俸上がり、そのうえ寿命も延びるのならよいではないかと言った。そうかといって金にこだわっている風もなかった。またどんな人間だって毎日排泄物は必ずあるもので、それをいやがるのはどういふことだろう。そういうところで働く人こそ社会のためになる人間であるし、犠牲的精神の持ち主であると力説し、更につけ加えた。

「大体現在の教育ママがいけないのよ。子供を学者や企業家、政治家にでもする気になっているんだから。糞尿の処理だってする人がいないと世の中はウンコの山になってしまふよ」

なるほどそうかも知れないが、人間というものは能力に応じ、働くことが自然ではないかと思った。

私は、し尿処理所に移ることに決めた。私の性格からして、上司から転勤の話が出るとそこに居座ることの嫌いな人間である。嫌われるところにいるもんかという気短なところがあり、幾分、感情的にもなった。それが、私の欠点であったのである。一週間後の月変わりから私はし尿処理所に勤務することになった。私の仕事は業者がタンクに糞尿をあける量を確認し、料金の伝票をきるのが主な仕事だった。仕事としてはこれも比較的楽な方であったが、新鮮な「黄金の湖」に立ちきりとあつて異様な悪臭に悩まされた。今までも芳しい仕事とはいえなかったが、今度はそこあたりになだようエナ臭いのがひと塊りとなつて、私の鼻の穴を狙ってくるのには閉口した。こんなことではいけないと自分に言い聞かせるのだが、これだけはいかんでもできなかった。世の中で一番きたくないものもろの排泄物の混合液。これを浄化し、清水として川に放流する仕事。こんな神聖な仕事はないと思つた。りしたが、社会通念として、し尿処理にたずさわる人間どもは、どうひいき目にみても社会的地位は低かった。義務教育は終えたというものの名ばかりで、実際には小学校四年ぐらいの実力しかなかったから、現在の社会機構の中では順当なことかも知れない。午前中は比較的古きクルマが混雑するが、午後はずっとすきが出来た。

新しい職場にも慣れた頃、樽田が移つて来た。私と同じく転勤を勧められていたのだが返事をしなかった。それがどうしたことか移つて来たのだ。その理由について、いつか尋ねてみようと思つた。彼の担当はコンプレッサの運転室付きとなった。「黄金の湖」の中に沈澱している有機物を分解のため空気中の酸素を送る機械であつて、時々タンクを見回るだけで機械を見ておればよかった。悪臭の面では、私よりずっと軽かった。

単純な仕事だったので、すぐに慣れてしまった。おまけに嗅細胞も長期間、同じ刺激を繰り返すと鈍感になったのか「悪臭」は苦にならなくなったし、また新しい職場に対する緊張感というものもなくなった。槇本から貰った蜜をクリームの容器に入れ便所に入れておいた。そして毎朝排便後、蜜に浸したガーゼを肛門に挿入していた。そのせいか最近痔の調子がよく、出血はなくなり、排便の際の苦痛が軽くなったような気がする。とにかく血をみなくなったことは精神的に楽であった。蜂蜜の効用が出てくると、私は蜜蜂に対する興味が倍增した。槇本の話も本当のような気がして、飼育してみたい気になった。私は日曜日に槇本から越冬した一群を箱付きで買ってきた。そして物置の横に置いた。それからというものは朝早く起きて蜜蜂を観察するのが楽しみとなった。私は小学校や中学生のよく行ふ単純な観察だけでは気がすまなかった。私は勤め先を休み、蜜蜂の巣箱の二面を切り抜き、ガラスを入れて外から見えるように改造した。働き蜂は一群に三万匹はいるといわれ、集蜜に外に出るのはその三分の一に相当する一万匹とされていた。あとの二万匹は清掃と育児、建築、警備など専ら内務に当たることになっていた。しかし私は、この目で確認しないと気がすまないたちである。

ある日、急に思い立ち羽化したばかりの働き蜂に赤いマジックインキで印をつけることにした。数は十匹で、外に集蜜に出るまでの日数や内務における仕事の分担順序などを知るためだった。こんなことをする時は、風のない暖かな日が蜂の習性上彼等を刺激しないでよかった。朝からよく晴れた日に私は勤め先を病氣ということで休んだ。巣箱を扱っても蜂が怒らないのは、午前十時から午後三時頃までの気温の高い時である。私は準備をして十時かきりに巣箱の蓋をあけた。巣脾の上に載せてある麻布を静かにはぐと、枠の上にいた働き蜂が一斉に静止し、私をにらんだ。今にも私に向かって

攻撃をしてくる姿勢にあった。こんな時あせると刺されてしまう。静かに巣脾をあげ、蜂児様の巣房から僅かに顔を出した働き蜂を割箸で引き出した。強くはさむと死んでしまうし、ゆるいと抜け出してしまふ。すばやく赤いマジックインキで翅と背中から腹にかけて染めた。私はこの働き蜂を「アカ蜂」と呼ぶことにした。この「アカ蜂」の行動を見れば生態が正確に解るのである。十匹染めるのに手間どってしまった。赤く染められた働き蜂は自分ではなんの感じもないらしい。色盲なのだから仕方がない。「アカ蜂」は仲間をかきわけ、上方にある貯蜜圈に行くと、蜜をなめはじめた。これから働き蜂としての仕事の第一歩が始まるのである。私は巣脾を箱に戻すと、目を出入口に転じた。十数匹の体色の濃い、おそらく古参の働き蜂が頭を出していた。彼等は巣箱に戻ってくる働き蜂を警戒した。腹一杯に蜜を飲んで戻ってくる仲間をいちいち触角で体に触れていた。人間社会でいう守衛に相当するものである。守衛蜂は相手の体に触角で触れただけで仲間であるのか、他所の群れなのか見分けることが出来るのである。顔を覚えていたのではなく、嗅覚が極度に発達しているのである。百箱も同じ場所にあっても決して自分の巣箱を間違えることはないのである。間違えれば直ちに追い返されるか殺されてしまうのである。

午後三時頃、再び巣脾をあげてみた。「アカ蜂」は誰におそわるともなく羽化して出た空房の清掃を始めたのである。すなわち成虫になってからの最初の仕事はこれで、三日間行うことになっていた。巣房内が完全に清掃されないと、王蜂は産卵しない。「アカ蜂」と古参らしい働き蜂とがレスリングをしていた。きつと掃除の仕方が悪いと叱られているんだな、などと想像したりした。

「お父さん。いつまで眺めてんの、ばかみたい」